

## マルコによる福音書 6 章 30 節～44 節

2016 年 1 月 28 日

古本 靖久

1、聖歌 243 番 「神の約束 果たされるまで」

2、お祈り

3、聖書輪読 （新約聖書 72 ページ）

4、テキストの位置

自分の故郷ナザレで受け入れられなかったイエス様は、付近の村へと行かれ、12 人の弟子たちを二人一組にして遣わしました。

福音は外の世界へ	6:6b-13	弟子たちの派遣
	6:14-29	洗礼者ヨハネ、殺される
	6:30-44	食事の奇跡
	6:45-52	水上歩行
	6:53-56	ゲネサレトでのいやし

その弟子たちが宣教している間に、洗礼者ヨハネが殺される事件が報告されます。今日の場面はその後です。

マルコ福音書はイエス様による食事の奇跡を通して、イエス様が神の子であることを示します。その出来事は、旧約聖書の出エジプト記の中にある、神さまが人々をマナで養われたことを思い起こさせます。

食事の奇跡は四つの福音書すべてに書かれた唯一の奇跡です。この出来事はわたしたちに何を伝えているのでしょうか。

5、節ごとに

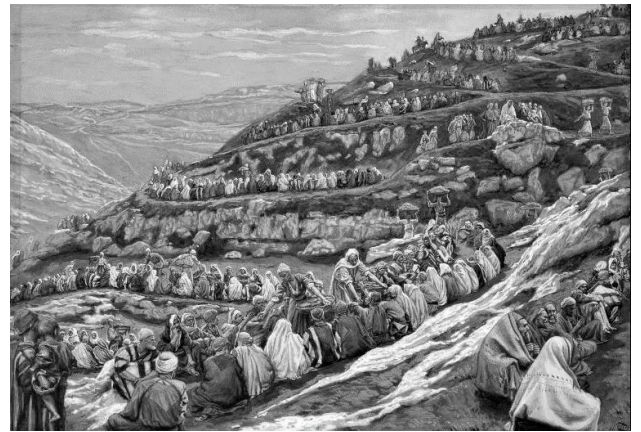
### ◆食事の奇跡

**6:30** さて、使徒（遣わされた者）たちはイエスのところに集まって来て、（そして）自分たちが行ったことや教えたことを残らず（彼に）報告した。

「使徒」という語は、マルコ福音書にはここにしか登場しません。他の福音書やパウロの手紙では、「使徒」という言葉を 12 弟子の枠を越えた宣教者の称号として使っています。しかしマルコでは、7 節で「遣わされた」者という意味でしかないようです。29 節のヨハネの弟子たちと区別したかったので、「弟子」という言葉を用いなかったのではないのでしょうか。

6:31 (そして) イエス (彼) は (彼らに)、「さあ、あなたがた (自身、自分たち) だけで人里離れた所 (荒れ野) へ行って、しばらく休むがよい」と言われた。(というのは) 出入りする人が多くて、食事をする暇もなかったからである。

イエス様は弟子たちに、あなたたち自身、自分たちだけで行きなさいと言われます。「自分たち」の中にはイエス様も含まれており、「群衆を残して」という意味です。ここには宣教に疲れた弟子たちに対するイエス様の配慮が見られます。マタイやルカには、この記述はありません。



「人里離れた所」は、悪魔の誘惑を退けた場所であり、最初の奇跡の後で祈るために退かれた場所です。原語では「荒れ野」と同じ言葉が使われています。

荒れ野は神さまと交わる場所であり、救いへと導いてくれる所だと考えられていました。そこに弟子たちを向かわせたのは、心の休息を取らせようとするイエス様の優しさがあったのかもしれませんが。

6:32-33 そこで、一同 (彼ら) は舟に乗って、自分たちだけで人里離れた所 (荒れ野) へ行った。ところが、多くの人々は彼らが出かけて行くのを見て、それと気づき、すべての町からそこへ (徒歩で) 一斉に駆けつけ、彼らより先に着いた。

イエス様一行は、荒れ野へと向かいます。しかし舟で移動した彼らを、人々は追いかけてきます。すべての町から押し寄せて来る人々の描写は、イエス様に対する絶大な人気をあらわしています。

人々はなぜイエス様の元に行ったのでしょうか。多くの事を教え、いやしの業をおこなうイエス様のそばにいたかったのではないのでしょうか。彼らはイエス様の言葉に飢えていました。肉体的な飢えに対する備えもせずに、舟よりも早く荒れ野にたどり着いたのです。

6:34 (そして) イエス (彼) は舟から上がり (出てくると)、大勢の群衆を見て、飼い主 (羊飼いのいない羊の群れの) ような有様を深く憐れみ、(そして彼は彼らに) いろいろと教え始められた。

「羊飼いのいない羊の群れ」とは、旧約聖書ではイスラエル民族のことを指していました。ここではイエス様の元に集まって来た群衆が何にも頼ることができず、迷子のようになっている様子をこのようにたとえます。そしてイエス様は彼らを見て、憐れまれました。

羊飼いのイメージは、比喩的に神さま（詩 23 編、イザヤ 40:11、エゼキエル 34 章）やイエス様（ヨハネ 10:11,14）の働きとして、聖書に描かれています。群衆には今まで羊飼いがいませんでしたが、イエス様が自分たちの飼い主となってくれるのです。

イエス様は憐れに思って何をされたのでしょうか。イエス様がしたことは、「教える」ということでした。マルコ福音書では教師としてのイエス様が強調されています。この食事の奇跡の背景には、イエス様による宣教があるのです。

**6:35-36** そのうち、時もだいぶたったので、（彼の）弟子たちがイエス（彼）のそばに来て言った。「ここは人里離れた所で、時間もだいぶたちました。人々（彼ら）を解散させてください。そうすれば、自分で周りの里や村へ、何か食べる物を（自分で）買いに行きましょう。」

荒野には、当然お店はありません。またイエス様は弟子たちを派遣した時に、「旅には杖一本のほか何も持たず、パンも、袋も、また帯の中に金も持たず、ただ履物は履くように、そして下着は二枚着てはならない」と命じられていました。

また弟子たちは、この場所に休息を取りに来たのであって、大勢の人がやって来ることになるとは全く思っていなかったはずです。つまり何の備えをしていなくて、当然なのです。だから人々を解散させて、自由に自分たちの分を買いに行かせてほしい、そのように願っても不思議ではありません。

あるいは弟子たちは、早く休息を取りたくてたまらなかったのかもしれませんが、いつになったらイエス様は自分たちをゆっくりさせてくれるのか、イライラしながらイエス様の話を聞いていて、ついにしびれを切らしてイエス様に話しかけたのでしょうか。

**6:37** これに対して（すると）イエス（彼）は（彼らに）、「あなたがた（自身）が彼らに食べ物を与えなさい」とお答えになった。（そして）弟子たち（彼ら）は（彼に）、「わたしたちが二百デナリオンものパンを買って来て、みんな（彼ら）に食べさせるのですか」と言った。

するとイエス様は驚くことを言います。「あなたがた自身が」と。原語ではあなたがたという語が強調されています。弟子たちは困惑したことでしょう。そしてこう答えます。「わたしたちに買いに行けと言われるのですか」。

1 デナリオンは労働者の一日の賃金ですから 200 デナリオンは 200 万円くらいだと考えたらよいでしょう。弟子たちがそのような大金を持っているはずもありません。また近くにそれだけのパンを買える場所はないでしょう。弟子たちはとても困ったに違いありません。

弟子たちのこの答えは、マルコ福音書だけに見られます。よく見ると弟子たちは人間的な考えで、物事を判断していることに気づきます。つまりイエス様の力を全く理解していないのです。弟子たちの無理解がここでも描かれています。

**6:38** イエス（彼）は（彼らに）言われた。「（あなた方は）パンは（を）幾つある（持っている）のか。見て来なさい。」弟子たち（彼ら）は確かめて来て、言った。「五つあります。それに魚が二匹です。」

きっと、弟子たちは舟に見に行ったのでしょう。パンはユダヤ人の主食でした。直径 20～50cm で、厚さは 2mm から 1cm、丸く平たい形に作られていました。またパンの多くは、ドーナツのように真ん中に穴が開いていたそうです。

ヨハネ福音書では、このパンと魚は少年が持ってきたとされています。しかも持っていたパンは大麥パンだと書かれていました。大麥パンは貧しい人や家畜が食べていたそうです。



しかしここでは、パンと魚は弟子たちの用意したものであり、パンの材料も小麦か大麥かはわかりません。しかしたとえ 50cm のパンであったとしても、たった 5 つではこの群衆を満足させることなどできないでしょう。

**6:39-40** そこで、イエス（彼）は弟子たち（彼ら）に、皆を組に分けて（組々に）、青草の上に座らせるようにお命じになった。（そして）人々（彼ら）は、百人、五十人ずつまとまって腰を下ろした。

イエス様は食事の集まりをする組を作るように命じます。100 人ずつだと 50 組、50 人ずつだと 100 組のまとまりが出来ていきます。

とてつもなく広い場所で、イエス様は教えられていたのでしょう。サッカーの J2 徳島の一試合あたりの観客数が 5000 人位です。そのスタジアムと同じくらい広い場所が必要なのかもしれません。

これらの数字が並べられるほどに、わずかなパンと魚では何の足しにもならないことが、印象づけられていきます。

**6:41** (そして) イエス (彼) は五つのパンと二匹の魚を取り、天を仰いで賛美の祈りを唱え (祝福し)、パンを裂いて、弟子たちに渡しては (彼らに) 配らせ、二匹の魚も皆に分配された。

この部分は、聖餐式を予示するものとして考えられることがあります。しかしユダヤでは、家長が祝福し、パンを裂いて家族に配るのは一般的なことです。ちなみにユダヤ教徒の祝福の祈りは次のようなものです。

「我らの祝福されし主なる神よ、あなたはこの世界の王であり地よりパンを生み出される方です」

そのパンと魚を、弟子たちの手を通して人々に配らせました。「あなたがた自身が彼らに食べ物を与えなさい」と言われたイエス様の言葉が思い起こされます。



**6:42-43** (そして) すべての人が食べて満腹した。そして、パンの屑と魚の残りを集めると、十二の籠にいっぱいになった (集めた)。(また魚の残りも集めた)

イエス様は、人々の身体的な窮乏も取り除いてくださいました。教えにより人々の魂を養い、パンと魚により人々の肉体を養ってくださったのです。

どのようにパンと魚が増えたのか、聖書には具体的に何も書かれていません。そのため、この奇跡を自分たちに理解できるように解釈する人もいました。たとえば弟子たちが自分たちの食料を惜しみなく分けてくれたのに感動して、わずかなパンの粉を口にただけで胸がいっぱいになってしまったとか、群衆の中には弁当を持ってきていた人も大勢いたが、人に取られるのが嫌で隠していた。でも自分たちのパンを配る弟子たちの姿に感動して、自分たちの弁当も分け始めたとか。

そのような合理的解釈をしたくなる気持ちもよくわかりますが、聖書は、わずかなパンと魚をイエス様が手に取って配ったら、みんな満腹したとだけ書かれています。そのことを、イエス様がなされた奇跡物語としてそのまま受け入れたいと思います。

6:44 (そして) パンを食べた人は男が五千人であった。

最後に聖書は、その場にいたのは 5000 人だと報告します。新共同訳聖書には「男が」と書かれていますが、男性形名詞が使われているからそのように訳したのだと思われます。

しかし英語でも **men** は人々という意味も持つように、古代ギリシア語では、「男」の複数形を用いるときには男女の区別をせずに、単に「人々」という意味で用いられていました。マタイのように「女と子供を別にして」とわざわざ書いてあれば、「男だけで」という意味になりますが、マルコでは「人々の数は 5000 人」という意味で捉えてよいと思います。

ともかくそれだけ多くの人が、イエス様の奇跡によって満たされたのです。

<今日の箇所から>

群衆はイエス様を求めて、荒れ野へ行きました。舟よりも早く着いたということは、何の準備もしないで、ただイエス様の元に向かったということの意味します。イエス様はそのように、自分にしか頼ることのできない人々の姿を見て、憐れみました。

わたしたちは聖餐式の中で、「主よ、憐れみをお与えください」と唱えます。その時にわたしたちは今日の箇所の群衆のように、イエス様の言葉を求めて唱えているでしょうか。真の羊飼いを求めて、礼拝に集っているでしょうか。

弟子たちの立場からも今日の箇所を考えたいと思います。イエス様が弟子たちに言った言葉、「あなたがた自身で」。わたしたちはイエス様の奇跡に参加するように招かれています。イエス様はわたしたちをも用いてくださるのです。

わたしたちは弟子の一人として、今それぞれの地に遣わされています。イエス様から直接いただいたものを隣の人に渡すのは、わたしたちの大切な務めです。

そしてイエス様の行いにも注目しましょう。この箇所を讀んでいくと、人々が満腹したところにばかり目が行ってしまいます。しかし、イエス様はその前に、群衆に教えておられました。パンを与えたことが社会活動だとすれば、イエス様の教えは福音宣教と言えるかもしれません。

大切なのは、その両方がおこなわれているということです。どちらか片方ではありません。両方そろっていることが必要なのです。教会の働きも、同じなのではないでしょうか。

今回の学びはこれで終わります。次回は 2 月 25 日(木)10 時 30 分からです。「水上歩行、ゲネサレトでのいやし」(マルコ 6 : 45~56) について學んでいきます。